「大津絵」をフランスに紹介 クリストフ・マルケ

日仏会館・日本研究センター所長

日本でもほとんど知られていない江戸時代の「大津絵」を掘り起こし、フランスで解説本を出版したフランス人がいる。マルケ氏は、これまで多くの日本美術をフランスに紹介し、日仏の懸け橋としての役割を果たしてきた。

「大津絵の表現は日本のマンガの元祖だと思う」

●聞き手＝秋本 裕子（編集部）

――「大津絵」を紹介する本を4月にフランスで出版したそうですね。

マルケ 篆刻（てんこくか）家の楠瀬日年（1888～1960年）が1920年、消滅の危機にあった大津絵に魅了されて模写し、合羽摺（かっぱず）りの木版画に起こした作品を大津絵版画集にまとめました。私が今回出版した『日本の民画・大津絵』（『OTSU-E』ピキエ社）は、その版画78点を復刻して、画題一つ一つに解説を書き、大津絵の歴史と魅力をフランス人にもわかるように説明したものです。構想から3年がかりで出版にこぎ着けました。欧米で大津絵を題材とした書籍が出版されたのは初めてです。

大津絵は、江戸時代に近江国（滋賀県）で生まれ、東海道を行き交う旅人向けに土産物として安く売られた民画。人気を博したが、明治時代になると鉄道が開通し、旧東海道を歩くという形態の旅に取って代わられると、廃れていった。

――大津絵はパターンがいくつかありますね。

マルケ 名もない絵描き職人が時間をかけずに書くものでしたから、代表的な画題がある程度決まっていました。初期は民間信仰の一環としての安い仏画から始まり、あまり面白味がなかったのですが、時代がたつにつれて次第に世俗的になり、風刺や教訓の要素が強まっていきます。

――例えばどんな？

マルケ 七福神の大黒天（財宝の神）と福禄寿（長寿の神）が相撲を取っている画がありますが、これはお金と健康のどちらが勝つかを風刺したものです。また、鬼が法衣を着て念仏を唱えている「鬼の念仏」という画題がありますが、見た目はお坊さんでも心は鬼のような人物を風刺したものだそうです。

江戸時代の日本に表現の自由はなく、幕府による検閲も厳しかったので、権力への不満をユーモアを交えて表現した画もあります。例えば、「槍持ち奴（やっこ）」という画題は、大名行列の先頭を歩く奴の姿を描き、その威張った様子を風刺したものです。このように、人間の営みをユーモラスに批判した風刺が大津絵の魅力です。私は、大津絵の滑稽（こっけい）な側面や省略の表現が、ある意味で日本のマンガの元祖と言えるのだと思います。

「『フランス人に大津絵を紹介したら受ける』と100年前に浅井忠が言った言葉を実現できてうれしい」

撮影＝根岸 基弘・東京・恵比寿の日仏会館フランス事務所で

●プロフィール● Christophe Marquet
1965年フランス北部リール市生まれ。リール大学で西洋美術史を、フランス国立東洋言語文化大学で日本語、日本文学を学んだ後、東京大学に留学。近世・近代日本美術史と出版文化史を専攻し、浅井忠と明治美術の研究で博士号取得。92年からフランス国立東洋言語文化大学の日本語・日本文化学科で教壇に立つほか、11年9月からは日仏会館・フランス日本研究センター（東京・恵比寿）所長も務める。江戸・明治の画譜を多数仏訳、復刻出版している。

残る大津絵は約300点

――今回、なぜこの本をフランスで出版したんですか。

マルケ フランス人は日本の美術が好きで、浮世絵は特に人気があります。でも大津絵はまったく知られておらず、海外の美術館にはまとまったコレクションがありません。なぜなら、大津絵はもともと美術品ではなく土産物で、安いからすぐに捨てられてしまい、後世にほとんど残っていないからです。日本の美術館にあるのは多く見積もっても300点ほどです。その大津絵をフランス人に紹介したら面白いんじゃないか、と思ったのがきっかけでした。

マルケ氏は当初、西洋美術史を学んだが、その後、日本美術史に目覚め、1989年から東京大学に留学。博士論文で明治の代表的な洋画家・浅井忠（ちゅう）の晩年の画業を調べるうち、日本でもあまり知られていなかった絵師や画譜の研究に行き着いた。

――日本美術史が専門ですね。

マルケ 高校卒業後、最初は出身国フランスの大学で西洋美術史を学びました。でも西洋の古典美術は昔からよく目にしていたもので、それほど興味が湧かなかったんですね。

そんな時、翻訳で谷崎潤一郎の小説『瘋癲（ふうてん）老人日記』や『陰翳礼讃（いんえいらいさん）』を読んで感銘を受けました。三島由紀夫や川端康成もたくさん読みました。30年前の当時、フランスでは谷崎も川端も人気がありました。西洋より東洋の方が、私にとっては未知の世界でしたから魅力を感じましたし、日本の美術や文学についてもっとよく知りたいと思いました。

でも、当時は日本語を知りませんでした。本格的に東洋の美術史を学ぶなら言葉を勉強しないといけない。そこで、パリの国立東洋言語文化大学に入り直して、日本語や韓国語を学びました。修士課程までフランスにいましたが、博士論文を書くために来日。東京大学に留学し、最初は浅井や中村不折など明治の洋画家の研究をしました。

――浅井忠の研究から大津絵の研究へ、どう結びついたんですか。

マルケ 浅井忠は1900年から2年間パリに留学して洋画を勉強し、02年に京都へ拠点を移して、洋画から工芸の世界に入りました。彼はそこで大津絵を再発見しました。素朴

フランスで4月に出版した『OTSU-E』。表紙には「鬼と鼠と柊」という、ネズミが鬼を追い出す風刺画を使った（右）とマルケ氏が出版した鍬形蕙斎の略画式の複製本（左）

でユーモラスなデザインに魅了され、現代工芸に生かすというユニークな試みをしています。彼は、大津絵のデフォルメやプリミティブ（原始的）な表現に、近代西洋絵画にも通用する要素が含まれていると考えていました。それを知って、大津絵について研究を始めました。

――大津絵の資料は、どのように集めたんですか。

マルケ 東京の日本民藝館や大津市立歴史博物館、関西の骨董屋などに何度も足を運び、大津絵の資料を徹底的に探しました。今も続けています。3年前には、京都の骨董屋で偶然、浅井のデザインによる大津絵の図柄の陶器皿を見つけました。アールヌーボーと大津絵の融合のようなユニークな作品です。それを（12年7月放送の）NHKの日曜美術館「近代デザインの開拓者　浅井忠」に出演した時に発表しました。

浅井は100年前に「フランス人に大津絵を紹介してやったら非常に受けるだろう」と言っています。浅井を研究するうちに、江戸時代の日本にも風刺の文化が花開いていたこと、そして大津絵には浮世絵と同じくらい、日本人やフランス人を引きつける魅力があることを実感しています。浅井の言葉を私が実現できてうれしいですね。

マルケ氏は今回の大津絵のほか、葛飾北斎が絵手本として発行した『北斎漫画』や『諸職絵本新鄙形』のフランス語版など、江戸時代に関する著書を多く出版している。江戸中期の浮世絵師、鍬形蕙斎（1764～1824年）に関する解説本もその一つだ。

――博士論文を書いてから、フランスに戻っていますね。

マルケ その後は日本とフランスを何度も行き来しながら、研究を続けてきました。97年から99年までの2年間は日仏会館の研究員、そして04年9月から08年8月までは、東京・駒込の東洋文庫の中にあるフランスのアジア研究機関である国立極東学院の東京支部代表として赴任し、日本人の研究者と協力して、フランスにある江戸時代の和本コレクションや出版文化の研究をしていました。

フランス各地の和本研究

――日本の美術史に関する多くの著書をフランスで出版しています。

マルケ 日本での研究活動を通じて、フランス各地に江戸時代の和本（木版摺りで和綴じの本）の立派なコレクションがあることを知りました。ジャポニズム（日本趣味）が隆盛を誇っていた19世紀後半から20世紀初頭にかけて、フランスの画商や収集家が、浮世絵だけでなく和本も数多く集めていたんです。でも、その後は第一次世界大戦とともにジャポニズムは忘れ去られ、それ以降はほとんど研究する人もないまま死蔵されていたのが実態でした。それを掘り起こす作業をしました。

フランスの素晴らしい和本コレクションの一つは、日清戦争の頃に来日したエマニュエル・トロンコワが収集したものです。トロンコワは忘れられた在野の日本学者で、貴重な江戸の絵入り本をたくさん集めました。1999年から、このコレクションの調査をしており、その中で有名な戯作者・山東京伝の幻の草稿本も発見することができました。そして一昨年、大手前大学（兵庫県）でシンポジウムが行われ、長年の調査の結果を『日仏文学・美術の交流―「トロンコワ・コレクション」とその周辺』（思文閣出版、14年）にまとめました。

和本は木版摺りのため、1冊ずつ出来が違います。中にはフランスにある物が世界で唯一のものであったり、出来が一番良かったものもありました。そうした宝の山を調査していくうち、江戸中期の浮世絵師、蕙斎が描いた絵本に出会ったんです。『人物略画式』と『鳥獣略画式』です。今まで見た浮世絵とはまったく違う次元の絵に驚きました。

――略画とは。

マルケ 文字通り、簡略化したごく単純な線で生き物や人物の本質をユーモラスに描いたものです。略画としては、風刺的な絵巻物の元祖と言われている『鳥獣人物戯画』から、葛飾北斎の『一筆画譜』あたりまで、よく知られていますよね。

それに対して、蕙斎の「略画式」は日本でもあまり知られていませんが、『北斎漫画』が世に出る20年ほど前、18世紀終わりに出版されていました。歌麿の美人画に代表される浮世絵が写実的で細かい技術を競ったのに対し、蕙斎は極端に単純化した線で人物や動物の本質をとらえました。その絵には動きのエッセンスが見事に映し出され、一つ一つが生き生きとしてユーモラスです。蕙斎を調べれば調べるほど、その作風に引きつけられました。「略画式」が彼の真骨頂だと思います。

――当時のフランスでも、蕙斎は知られていたのですか？

マルケ ジャポニズム時代のフランスでは、蕙斎は北斎の先駆者として美術の世界でしばしば話題になっていました。彫刻家のロダンも彼に関心を持ち、「略画式」を持っていたほどです。ロダンは人の動きをどう表現するかに力を入れていましたから、衝撃を受けたに違いありません。蕙斎の存在がジャポニズムの隆盛に一役買っていたわけです。

こうした功績を知ってもらいたいと、11年にフランスでこの『人物略画式』と『鳥獣略画式』を復刻出版しました。40㌻（約5400円）という高額にもかかわらず、4000部も発行され、多くのフランス人に手に取ってもらいました。フランス人が蕙斎の絵に感動してくれることはうれしいですね。

マルケ氏は現在、フランスの大学で日本美術史の研究をする傍ら、日仏会館の日本研究センター所長として、日本とフランス間の文化の理解を深めるシンポジウムやイベントを企画し、日仏の学術交流に力を入れている。

――日本での仕事は？

マルケ 本業はフランスの国立東洋言語文化大学教授であり、学生に日本美術史を教えることです。日仏会館で博士課程の院生を中心に、約30人のフランス人の学生に、ゼミなどで研究を指導したりしています。

また、現在は日仏会館の所長という立場も与えられており、日本を拠点に研究活動するのも重要な任務です。学者としての研究と、所長の実務という二足のわらじで忙しい日々ですが、とても充実していますね。

日本に13年在住

――日本生活も長くなりました。

マルケ 研究者としての約25年間、日本とフランスの間で何度も引っ越ししました。日本には通算で約13年住み、フランスと日本での生活はほぼ半々になりました。妻の弘子は日本人ですし、日本もフランスも私にとっては必要で、どちらも故郷です。

「日本でも知られていない日本美術を掘り起こし、フランスに紹介する懸け橋に」

日仏会館のフランス事務所長は11年9月から5年間の任期で来ていますから、16年夏の任期満了まであと1年に迫ってきました。

――最近の関心は何ですか。

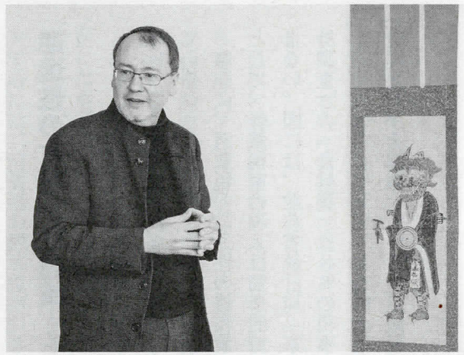
マルケ まだまだ日本でもフランスでも知られていない日本美術がたくさんある。それらを掘り起こし、フランスに紹介する日仏の懸け橋としての役割を続けたいと思っています。

例えば、東京の三菱一号館美術館で現在特別展が開催されている、幕末・明治の異端の絵師・河鍋暁斎の素晴らしい芸術をフランスで紹介したいです。動乱の時代を生き抜いた暁斎は反骨の精神の持ち主で、彼の絵は我々を笑わせたり、感動させたりする強いパワーを持っています。

そのほか、最近は江戸時代の幟旗に関心があります。一部の画題が大津絵とも共通しています。これもまさに民画の一種。神社の奉納幟、端午の節句のための幟もありますが、素朴なデザインでありながら大変迫力があり、これらの絵に江戸の庶民の願い、祈りが込められていることがよく伝わります。

――今後の目標は。

マルケ 出版の目標としては、フランスの図書館や美術館に眠っている江戸時代の和本、とりわけ絵入り本についての著書をまとめたいです。フランス国立図書館は昔から世界の珍しい古典籍を収集しており、十数年前から膨大な珍書コレクションの中からギリシャ語、アラビア語、ペルシャ語などの古典籍の代表作を紹介する研究書シリーズを出しています。その中で、江戸の和本についての著書を担当することになりました。大変な仕事ですが、フランスで貴重な和本に触れたり、研究したりする、かけがえのない経験です。和本も重要な文化遺産であり、その魅力をフランス人に伝えたいです。


買い集めた大津絵の掛け軸とマルケ氏